



尾関史著

子どもたちはいつ日本語を学ぶのか 複数言語環境を生きる子どもへの教育

ココ出版、2013年発行、233p.

ISBN : 978-4-904595-34-3

本間 祥子

1. はじめに

本書は、著者である尾関史氏が2009年に早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出した博士論文『移動する子どもたちの成長・発達を支えることばの教育の構築に向けて—子どもの主体性が育む学びの可能性—』をもとに再構成された前半部分と、2007年から2011年にかけて行われた、複数言語環境で育ってきた若者たちへのライフストーリーインタビューを分析した後半部分からなっている。

複数のことばの中で育つ子どもたちは、複数のことばをどのように捉え、どのように学んでいくのか。そして、ことばを学ぶ過程でどのようなアイデンティティを形成しながら成長し、どのような人生を送っていくのか。これらの問いに答えるために、尾関自身が関わってきた子どもたちと若者たちのケースを通して、子どもの成長・発達を支えることばの教育に向けた質的な考察が展開されている。

2. 本書の構成と概要

本書は、全4部、8章から構成される。各部、各章の概要は以下の通りである。

2.1 複数言語環境を生きる子どもたちとことば

第1部では、複数言語環境を生きる子どもたちの現状を「ことば」という視点から考察している。まず、第1章では、複数言語環境を生きる子どもたちの増加、その背景や置かれている状況の多様化、そして抱えている問題の深刻化という実態から、子どもたちが人としての成長・発達をも脅かされない深刻な状況にあることが指摘されている。国家間・言語間・文化間を移動する子どもたちの学びは、時間的・空間的に分断され、継続的な学習の保障が困難となっているのである。このような子どもたちの成長・発達を支える大きな可能性をもつのが、ことばの教育である。ことばは、子どもの思考や認知機能の発達を促すうえで重要な役割を担っている。それゆえ、ことばの発達を保障していくことが子ど

もたちの成長・発達の保障にもつながるのである。では、どのような視点で複数言語環境を生きる子どもたちへのことばの教育を行っていけばよいのだろうか。尾関は、これまでの年少者日本語教育の抱える問題を改めて整理することにより、複数言語環境を生きる子どもたちに求められることばの教育とは、長期的な視野・多面的な視野をもったことばの教育であり、周囲との動的な関係性の中で子どもたちが主体的に学びに関わり、主体的に学びを創っていくことを支えるものであると指摘する。つまり、子どもたちの成長・発達を支えるためには、子どもたちが本来もっている主体的な学びの側面に注目し、子どもたちが一人ひとりの主体として自己実現していくことを支えることばの教育が求められているのである。

では、子どもたちを一人の主体として捉え、主体的な学びを創っていくとは、一体どのようなことか。続く第2章では、子どもたちの主体的な学びを捉えるための視座が提示される。尾関は、学び手の主体的な関わりから学習を捉えようとする構成主義の立場に立ち、①子どもたちを能動的な学び手として捉えること、②学習を子どもと周囲の他者や環境との関係性の中で育まれるものとして捉えること、③教師や支援者は子どもたちが主体的な学びを育んでいくための学びの場を創っていく役割を担うこと、という3つの視点が必要であると指摘する。さらに、発達心理学研究の知見を応用することにより、子どもたちの学びには支援者が学びを創るという側面と同時に、子ども自身が学びを創っていく側面があるのだという。子どもの視点から学びを捉えなおすこと、すなわち、子ども自身が学びをどう捉え、学びに関わろうとしているのかという側面に注目し、主体的な学びを考察していくことが必要なのである。以上をふまえ、複数言語環境を生きる子どもたちのごとばの学びを捉える枠組みとして、「周囲との関係性」という空間的な広がり、「成長・発達」という時間的なつながりの2つの軸をもとに、それぞれの軸の中で子どもたちがどのようなことばの学びを展開しているのかを探る、という研究の視座が示されている。

2.2 ことばの学びを多様な関係性から捉える

第2部では、外国人児童に対して尾関が行った1年半にわたる日本語教育実践の記録をもとに、「周囲との関係性」の中で育まれていくことばの学びの様相が描かれる。第3章では、子どもが支援者とどのように関係を築きながらことばを学んでいくのかを、第4章では、日本語学習や教科学習といった学習対象とどう向き合い、学びを進めていくのかを、そして第5章では、ことばを学ぶことが子ども自身との関係の中でどのような意味をもっているのかが描かれる。

ここで特筆すべきは、子どもたちの学びを捉える手法として、質的研究が採用されていることであろう。年少者日本語教育における質的研究とは、従来の言語習得研究が子ども「個人」を単位に言語習得を検討しているのに対し、子どもが経験した行為や出来事を、それが生じた文脈・状況・関係と結びつけ、子ども自身の意味づけのプロセスに目を向けようとする方法である。この方法を使うことにより、従来の研究では明らかにされなかった、子どもと周囲の教師やクラスメートたちとのやりとりにおけることばの習得のプロセスへの接近が可能になるのである。本研究における調査者の立場は、単に観察者として子どもに外側から関わるのではなく、子どもの主体的な学びを育んでいく他者の一人として

子どもに積極的に関わるというものである。子どもたちの主体的な学びが周囲の他者とのやりとりの中で生まれるとすれば、支援者と子どもとの間でも様々な学びが起こり得る。ゆえに、支援者自身の変容過程をも捉え、描いていくことが、子どもたちの主体的な学びを考察するためには不可欠なのである。このような考えにもとづき、第3章にまとめられた、「スキヤフォールディング (Scaffolding)」(Wood, Bruner and Ross 1976) の概念をもとに行った実践からは、支援者自身の主体性が子どもの主体的な学びを育んでいく際に重要な要素であることが考察された。また、第4章の意味創りを目指した実践からは、学びを子ども自身の意味創りの過程として捉えなおし、その意味創りの過程を、教師や支援者とのやりとりの中で支えていくことが重要であると考察された。そして、子ども自身の語りを取り上げた第5章では、子どもにとって主体的に学ぶということは、子どもが周囲の友人や学習内容との間で社会的な関係性を築いていくことと深く関わっており、子ども自身が自分にとって意味のある関係性を徐々に創っていく中で、意味があると感じられることばの学びを育んでいく過程であることが明らかになった。

2.3 子どもたちの成長・発達におけることばの学びの意味

第3部では、学齢期に母国以外の国で育った4人の若者の語りを通して、子どもたちの「成長・発達」におけることばの学びの意味について論じている。まず第6章では、学齢期の大部分を母国以外の国で過ごしてきた2人の若者の語りを、続く第7章では、複数の国や地域の移動を繰り返す中で成長してきた2人の若者の語りを取り上げている。そして、彼らの語りから、幼少期の経験がその後の言語習得や人間形成、アイデンティティ形成にどのような影響を与えているのかを考察している。

考察にあたり、尾関が使用した研究方法はライフストーリーインタビューである。人の人生を「語り」や「物語」の立場から研究するライフストーリー研究において、人生を物語ることは、経験を有機的に組織し意味づける行為であると考えられる。学びの当事者である4人の若者たちは、自分自身の学びをどう意味づけているのか。そして、言語形成の面においても人格形成の面においても非常に重要な時期である学齢期に、複数のことばの中で育った子どもたちの日本語学習経験は、現在の学びや生き方、その後の生き方とどう関わっているのか。4人の語りからは、幼少期から成人した現在に至るまでの時間の流れの中で、ことばを取り巻く様々な経験を重ねながら自己を形成していく姿が浮かび上がってくる。

考察の結果、他者との関係の中で積み重ねられた言語使用の経験や、そこで受けた教育の経験が、自己の存在意義を見出したり、自分に向き合ったり、今後の自分を見出していく際の重要な支えとなっていることが分かった。ここでいう他者とは、決して誰でもよいというわけではなく、自分の思いや考えを受け止めてくれる相手であることが重要となる。そして、こうした幼い頃の経験が、その後の自己形成やアイデンティティ形成、キャリア形成に大きな影響を及ぼしていた。さらに、彼らが自己の経験に対して行う意味づけは、滞在年数や移動の形態、移動の頻度とは必ずしも一致しておらず、それぞれが抱える思い、あるいは、ことばを使って他者と築いた関係性をどう捉えるのか、という極めて個人的なもの結びつく中で育まれていくということが明らかになった。

2.4 主体としての育ちを支えることばの教育に向けて

第4部では、第3部までの知見をもとに、子どもの主体としての育ちを支えることばの教育に向けて、子どもたちのことばの学びをどう捉え、どう支えていくべきなのかを論じている。まず、子どもたちのことばの学びをどのように捉えるのか。尾関は、子どもたちと若者たちの主体的な学びの様相を整理することにより、以下3つの視点を提案している。①ことばの学びを周囲との関係性の中で多角的・多面的に捉えること、②ことばの学びを子どもの成長・発達の流れの中で捉えること、③子どもを複数の言語と多層的なアイデンティティをもった存在として捉えること。子どもたちのことばの力やことばの学びをどう捉えるかにより、その教育のあり方は左右される。それゆえ、以上3つの視点に立ち、子どもたちのことばの学びを捉えていくことが求められている。では、このように捉えたことばの学びを、どのように支えていくべきなのだろうか。ここで提案されているのが、以下の3点である。①周囲との関係性の中でことばの学びの場を創っていくこと、②子どもたちの人生を視野に入れたことばの学びの場を創っていくこと、③複数の言語と多層的なアイデンティティを支えることばの学びの場を創っていくこと。いずれも、一人ひとりの子どもたちがことばを使って結ぶ関係性を重視し、アイデンティティの形成を支えていくものである。このような視点に立ち、子どもたちのことばの学びを支える場を構築していくことで、子どもたちは自分自身の生き方やアイデンティティを見出し、一人の主体として自己実現していくことが可能となるのである。

3. 本書の意義と課題

これまでの年少者日本語教育研究では、国語教育の枠組みや成人を対象とした日本語教育の枠組みの中で、子ども個人の言語能力がどのように変化したのか、教師がどのような支援を行い、それに子どもがどう応えたのかといった「一方向的な視点」から子どもたちのことばの学びが捉えられることが多かった。しかし、本書において尾関が注目したのは、ことばを通して周囲との関係を築き、その関係の中でことばを学んでいく子どもたちの姿であった。この背景にあるのは、客観主義パラダイムから構成主義パラダイムへという、学習観の大きな転換である。従来、「学習」とは教師が学習者の頭の中に知識を詰め込んでいくものと捉えられていた。それに対して、「学習」とは学習者が周囲の環境と主体的にやりとりする中で起こるものと捉えられるようになったのである。「社会文化的アプローチ」と呼ばれるこの新たな学習観は、ヴィゴツキーによる発達観が源となる。ヴィゴツキーは、子どもと他者との関わりの中で学びが育まれていく過程の重要性を示し、「発達の最近接領域 (Zone of proximal development: ZPD)」(ヴィゴツキー 2001) の概念を示した。このZPDの概念をもとに、Woodら(1976)によって提唱された「スキヤフォールディング」は、尾関が実践を組み立てるうえでの基礎となっている。このように、学習を子ども個人の問題として捉えるのではなく、周囲の他者や環境、そして時には自分自身との主体的な関わりの中で生まれるものと捉えている点で、本書は従来の研究と一線を画している。

また、周囲との関わりの中で育まれていくものは、子どもたちの言語能力だけではない。子どもたちにとって、ことばを学ぶことはアイデンティティの形成と深い関わりをもつ。

複数言語環境を生きる子どもたちは、自分の意思とは関係なく「〇〇人」「〇〇語」といった周囲からの枠付けに翻弄される。しかし、本書で描かれたのは、そのようなカテゴリーに捉われず、ありのままの自分を受け入れ、自分らしく生きていこうとする若者たちの姿であった。複数の言語を学ぶということは、複数の言語や多層的なアイデンティティをもった自己を受け入れていく過程でもある。このような子どもたちの思いや気持ちを受け止め、自己を認めていけるような言語教育活動の方向性を示している点も、本書の大きな意義である。

以上をふまえ、今後の課題となるのは、本書で考察された観点に立っただけで一人ひとりの実践者が、いかに教育実践を展開していくのかということであろう。尾関は、子どもたちのことばとアイデンティティ形成を支える言語教育実践の一例として、留学生を対象とした日本語授業における「自分史」を書く実践を提案している。自分の過去と向き合い、現在の自分を見つめなおす過程を通して、これからの自分像を思い描いていくことができるという点で大いに成果が期待できる。一方、このように自分自身を俯瞰的に見る作業は、認知的な発達の上にある子どもたちには難しい場合もあろう。子どもの認知的な成長に寄り添った教育実践を積み重ね、公開していくことが求められる。

4. おわりに

かつて、複数言語環境を生きる子どもたちといえば、帰国子女や国際結婚家庭の子どもなど、一部の特別な存在と考えられていたかもしれない。しかし、近年このような子どもたちの存在がますます身近になっていることは、教育に携わる者でなくとも少なからず感じていることであろう。このような子どもたちと出会ったとき、どのような姿勢で向き合い、どのような言語能力を育てていくのか。本書では、支援者であり研究者でもある尾関が悩み、考え、子どもたちと共に教育実践を創り上げてきた過程を共有することができる。自分自身の思いや考えをも含めた豊かな記述からは、子どもたちの声色、表情、やりとりをする様子までもが目に浮かぶようである。このように著者の体験を追体験する過程は、日本語教育を志す者、学校教育を志す者、子どもの教育に携わる全ての者にとって、自分自身の言語観・教育観を振り返る過程となり、実践を展開する上での指針となるであろう。以上から、本書は、複数言語環境を生きる子どもたちに関わる全ての人へ向けた、年少者日本語教育研究の新たな一歩を踏み出す書であるといえる。

参考文献

- ヴィゴツキー, L. S. (柴田義松訳) (2001) 『新訳版・思考と言語』 新読書社
 Wood, D., Bruner, J.S. and Ross, G. (1976) The role of tutoring in problem solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 17, pp.89-100

(ほんま しょうこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)